

なぜBankART1929が生まれたか？

BankART1929代表 池田 修

BankART1929は、歴史的建造物等を文化芸術に活用し、都心部再生の起点にしていこうとする横浜市の推進するクリエイティブシティ事業のリーディングプロジェクト。創造境界の形成に寄与すべく、様々なチームと協働しながら、新しい街のネットワークを構築してきている。ジャンルは美術、建築、パフォーマンス、音楽等多岐に渡り、スタジオ、スクール、カフェパブ、ショップ、コンテンツ制作等をベースにしながら、主催、コーディネート事業等、年間数百本の事業を活発に行なっている。この論文では、事業内容にも触れながら、なぜBankARTが生まれかについて考察する。

横浜の誕生

横浜（横浜市）は、諸外国からの圧力の中、時の明治政府がこの地を選び、開いた港街だ。政府は国の安保を確保しながら、東京から25キロメートル離れたここ横浜を欧米との窓口として機能させていく。居留地、新橋から横浜（桜木町）間の鉄道の敷設、外国人墓地……。どこかで読んだ記憶があるが、横浜の都市形成にとって外せない出来事は、開港、関東大震災、横浜大空襲だという。ひとつめが、諸外国及び日本政府からの要請、二つめが、自然災害、三つめが人的被害。種類は異なるが、こうした巨大なエネルギーが横浜を翻弄し、破壊、変化させたことは事実だ。後ろ二つは、他の都市でも経験しているだろうが、横浜の場合は都市化へのスタートが開港という全く人為的なものだっただけに、その後の変遷にも特徴のある様相をみせてくる。100戸の寒村から西洋の窓口の都市としての急激な変化。建物、街路、食べ物、衣装、風俗、文化等々の全てが、進取の気性で、俄つくりの西洋風の都市（デザイン）が形成されていく。ハイカラという言葉に代表されるように、たった50年あまりで、金融都市、近代都市へと変貌を遂げる。ところが、関東大震災後の写真が示すように、一夜にしてその脆弱さを一級の自然の力の前にさらけ出す。横浜は壊滅的な廃墟都市へと化す。大震災の1923年以降、横浜は防災都市（耐火、構造）を自覚しながら、復興を行なう。近代都市、都市デザインへの力強い意志が芽生えてくる。横浜は数多くの西洋建築（RC 建築）を有した都市へと生まれ変わる。ところがそのような復興にもかかわらず、たった20年程度で米軍によ

る横浜大空襲。でもその当時の写真をみると震災のときは少し様子が異なる。確かに木造の建物は焼失しているが、RC造の建物は残っている。これは米軍が、意識的に爆撃弾ではない焼夷弾を用いたからだ。日本を統治していく基地として横浜に進駐することを考えていたから西洋建築及び港湾施設を残したのである。現在横浜に震災後に建てられた1928年、29年竣工の建物が多いのは、決して偶然ではなくこういった事情によるものだ。

シティズンブライドの芽生え

こうして、開港、震災、戦争という三つの圧力を「都市の経験」として生きてきた横浜は、大きく飛躍する予感（DNA）が授けられることになる。それは、それらの出来事を真正面から受け止め、その圧力を生かしながら歩んできたことに対する自負だ。こうして都市にとって極めて重要である「シティズンブライド」が芽生えはじめる。我々の創造都市のプロジェクトは、確実にこうした歴史的な都市の生成（構造）の上になたっている。

国からの自立

開港から150年を経た現在、横浜は368万を有する大都市に成長する。金沢区のように鎌倉時代から人が住んでいた街もあれば、丘陵地に大規模開発を仕掛けて数多くの横浜都民を育んだ都筑区や青葉区のような街もある。年間10万人の人口増加を幾度も続けたというのだから、想像を超える力で、都市計画の強い磁場が働いていたことがわかる。この極めて力強い都市デザインへの意志は、もちろん先に述べた「DNA = シティズンブライド」を受け継いだからこそ成せる技だ。1963年から社会党飛鳥田政権がスタートし、田村明等のアーバンデザイナーによる、いわゆる六大事業という名の都市計画が立ち上がる。そのプロセスにおいて、横浜には「国からの自立」という自覚が生まれてくる。その中でも、都市デザインにおける典型的なエピソードが「吉田橋付近の高速道路地下化」だろう。東京では、東京オリンピックを機に川を埋めながら、高速道路網を設置したことに代表されるように、性急な都市計画が施されるが、ここ横浜でもこうした計画がたてられる。この強引な（首都）高速道路計画に対



関東大震災直後の横浜港周辺／横浜開港資料館所蔵

して、横浜市は強く抵抗する。そして最終的に高速道路そのものは受け入れるのだが、地下に埋設させるという極めて困難な解法（そして恐らくそれは正しい解）を採用する。国との協調関係を保ちながらも、自己の立ち位置を築き上げる横浜スタイルの確立だ。横浜は「国との協調と自立」というダブルバインドの道を明確に打ち出していくのである。そしてこうした背景のもと、この40年間、長期に渡る六大事業は着々と実施実現され、港北ニュータウンやベイブリッジ、みなとみらいなど、その計画の大半はひとつまずの完成をみる。

これからの50年

40年に及ぶ大きな事業を成し遂げ、次に向かうべき方向をある意味で見失いがちな、脱力感にも似た状況の中、2002年、中田市長が登場する。そして、その伴走役として、田村明の志を受け継ぐ、かつて都市デザイン室室長を務めた東京大学教授の北沢猛が、横浜市参与として、再び横浜の都市デザインに深く関わることになる。

一体自分たちは次にどこに行くのか？これは恐らく北沢氏の頭を占有し続けていたテーマだったであろう。40年間、確かに問題は解いてきたが、次の世代にとって大切な問題は何か？何をモチベーションに街をつくっていけばいいのか？こういった脅迫にも似た課題が充満していたに違いない。

創造都市構想

みなとみらいや横浜駅周辺のにぎわいに比して、旧市街地である馬車道地区は、空き物件率も増え、その再活性を望む声も大きくなっていった。歴史的建造物を活かしながら、文化を起点にし、街を元気にしていこうという（狭義の）「創造都市構想」の準備が始まる。北沢氏は、デザイン室時代、景観も含む都市デザイン（実際にかたちあるもの）を最も進めたメンバーの中心的な存在であったが、（もちろんソフトのプログラムをきちんと打ち出しながらだが）中田政権下では、意外にも「創造都市構想」という見かけとしてはソフト的なプログラムを推進していく。しかし、実際には、氏が提案した横浜市のクリエイティブシティ構想の四つの指標には、そのプログラムの先の未来都市への構想（インナーハーバー構想）を緻密に準備させていたことがわかる。

- (1) ナショナルアートパーク構想
- (2) 創造界限形成
- (3) 映像文化都市
- (4) 横浜トリエンナーレ

この指標の意味と現在の状況を私見もまじえて記してみよう。

ひとつめのナショナルアートパーク構想（NAP）とは、日本語に直訳すると国立芸術公園。これだけだとなんだかわからないが、案外きちんとした意味が込められている。それは国の整備した多くの港湾の土地を、商業や産業ではなく、公園やアートに活用することで

国の参加を促し、国との共同事業化を図る仕組みだ。横浜トリエンナーレ2008の開催を機に建築した「新港ピア」や150周年の記念事業として計画された「象の鼻テラス」はその典型的な例だ。国と協働することで、支出の削減をはかり、港としての機能と「文化や公園」を両立させながら、市民に豊かな空間を提供していくというのがNAP構想の骨子だ。

2番目の創造界限形成は、BankART1929の中心課題でもある。簡単にいうと都市における新しいコミュニティを形成せよ、ということ。いまどき味噌や醤油を貸し借りするわけではないが、都心部における新しい町屋を形成していこうというプログラムだ。横浜市の推進力と仕掛け、あるいは民間、国などの連鎖反応もあり、BankARTの周りには、現在1,000名を超えるクリエイターの活動拠点となる建物が数多く集積し、大分にぎやかになってきた。

3番目の映像文化都市。横浜市も明確には説明できていないように定義が難しい。当初は、映像産業コンテンツとの関わりを強く意識してのテーマ設定だったようだが、実際は誘致しかけていた某社が頓挫し、土地購入までいっていたゲーム会社の進出も、この不況下のもとリタイア。唯一、東京芸大大学院映像研究科が、「映画」「メディア芸術」「アニメーション」の3部門を開設することでできた。また2007年度から3年間継続した映像イベント「EIZONE」や2010年度に開催された国際映像祭「CREAM」も、「映像文化都市」を定位させるまでには至らなかった。さてこのような展開をみせてきた「映像文化都市」の定義はさておき、このテーマを創造都市構想に入れたこと自体は、僕は正しいと思っている。「映像はメタファーである」と語ったタルコフスキーの映画には水が幾度となく登場するが、豊かな水の恵を授けられた横浜が、現象としての都市「=映像文化都市」をテーマに掲げ、街を牽引していくことは結構いいことではないかと思っている。リジッتنا都市の構造を、他者と多様性を包容できる柔らかな構造へと導いてくれるからだ。

4番目の「横浜トリエンナーレ」は、創造都市構想全体の中での位置づけとしてはカンフル剤あるいは外科手術的な存在だ。3年に一度の都市のプレゼンテーション（祭り）だ。そのリズムに乗って、ハードもソフトも含めて、日常の街づくりを推進していこうという仕掛けでもある。またそれは同時に、未知なる都市（開発）空間への誘いでもある。横浜市の企図がどこまであったかは定かではないが、過去3回のトリエンナーレの会場は、常に海岸沿いの新しく開発するゾーンに位置している。2001年のパシフィコ（国際会議場：新築）+赤レンガ（改修）、2005年は山下埠頭の倉庫（改修）、2008年は新港ピア（新築）。拡張するフロンティアの意識が働いていたことは確かだろう。

これら4つの指標は複雑に絡み合い、部分が全体を補強し、構想の大きさの中で抜け落ちそうな部分をフォローする柔らかい仕掛けがあちこちに散りばめられており、また小さくまとまりがちな部分を

突破させる開口部もあり、という様に見事なコスモロジーを携えた生きたプログラムだといえよう。また北沢氏が、「インナーハーバー構想」にむかう前に、「創造都市構想」に着手したことは、極めて優れた決断、戦略だったといえる。それは、「横浜のこれから50年先をどうする?」という大きな課題にすぐに取りかかるのではなく、不可思議で、しかし何か可能性を秘めている「アート」というフレームを持っていくのが、現在の横浜にとって必要だと考えたに違いない。わからないものをわからないまま包容し、考え、立ち止まることの豊かさ。「創造都市構想」の挿入にはこういった意識が流れているように思う。

BankARTのことはじめ

BankART事業はこういった都市づくりの大きな文脈の中、2004年にスタートする。場所は、東横線横浜駅～桜木町駅廃線の痛みを伴いながら、新しく敷設されたみなとみらい線の馬車道駅上。1929年生まれ歴史的建造物の元銀行二棟がその舞台だ。この運営コンペの面接時、何故離れた建物二棟を同時に活用するのかを、北沢氏に確認するかたちで僕が質問した「街とやってくださいということですね」という言葉に象徴されるように、最初から最後までアートのためのアートではなく、街づくりの起点としてのプロジェクトだった。実際に活動をはじめてみて、幾度となく二館を往来する中、私たちは、あらゆる都市のエレメント、すなわち、人、建物、店、壁、空き地等を身体化していったように思う。BankARTが行なう事業は、自ずから街と関わるプログラムが大半をしめるようになった。まず心がけたのはいつでも館が開いていることだ。24時間というわけにはいかないが、23時までのバブタイムも含めて、イベントに参加する人だけを受け入れるのではなく、駅のようにここが市民の共有の場所であるということを強く意識しながら、館の運営を行なった。その考えは、当時記した次の文書にあらわれている。

『BankART1929は駅でありたいと考えている。ヨーロッパの駅のように様々な人々が行きかい、コーヒーやビールを飲み、ベンチで眠っている人、たまにはケンカをする人、自由に音楽を奏でる人がいる、そんな包容力のある心地よく過ごせる空間を目指していきたい。また横浜は貿易の街。人が集まり、アーティストが育ち、物が動き、情報が行きかい、経済が動く、交易の場所。何かを表現する人もそれをサポートする人も、それで食べていけるような経済構造へと共に変換していきたい。BankARTはそのための実験の場所でありたいと考えている。』BankART事業についての詳しい内容は「BankART Life II」やHPにあるので（巻末p246-248に添付あり）、ここでは省略するが、いくつかのエピソードをあげながら、BankARTの特徴を述べたい。

リレーする構造～リスボン

運営開始からわずか4ヶ月、信じられない話がとびこんできた。芸

大の映像学科がくるのでBankART1929馬車道（旧富士銀行）を明け渡してくれと。縦割り構造の弊害で庁内でも陰悪なムードが漂っているし、運営している側としても簡単に首を縦にふれるような事柄でもない。とはいえ東京芸大が誘致されてくるというのは創造都市横浜にとっては嬉しいことだし、私達の活動が誘致のきっかけの一部になったというのも聞いていたので、明け渡しそのものには反対する理由はなかった。そこでBankARTは3つの条件を市に提案した。(1) 歩いていける場所 (2) 同等以上のスペース (3) タイムラグなく移転。市はこれらの条件を全てクリアしてくれた。新しい移転先のオーナーである日本郵船への強い働きかけ、補正予算のスピーディな確保、移転先の12月末までの改修工事。2005年1月、BankART Studio NYKのオープン。旧富士銀行改修工事を経て同4月、東京芸大オープン。これら一連の仕事を見事にやりぬいてくれた。

リレーする構造～連鎖反応

BankARTの活動がほぼ1年経過したころ、森ビルがBankARTの真向かいの北仲地区の帝蚕倉庫群を再開発することになった。着工までの約2年間、仮囲いで閉ざすよりも、道路に面した事務所棟等を活用して何かできないかという相談を受けた。固定資産税と軽微な管理費は捻出して欲しいという条件。定期賃借しかないと判断した。1Fが小部屋に分かれており、若いアーティストでも十分家賃を払える間取りだし、3Fと4Fは比較的大きな部屋割りなので力量のある建築家チームなどに向いている。約60チームに声をかけ、二度の下見会で約50チームの入居が決定。廉価な家賃設定と森ビルのスピーディな対応も相まって、3ヶ月足らずで「北仲BRICK & WHITE」オープンという奇跡がおこった。「みかんぐみ」が早々に移転を決めてくれたことによる誘因力も大きかった。このプロジェクトで改めて認識したことをふたつだけ言及すると、よいクリエイターが集まると自然発酵するということだ。北仲は入居者自身による意志とプロデュース力でオープスタジオなどを通して、街に開き、発信していくチームに成長していった。もうひとつは、こうしたアーティストの動きに反応して、市が北仲の暫定使用終了時期を見据えて「ZAIM」を準備・開設してくれたことだ。公募だったが、北仲の入居者の約1/3が移り住んだ。またクリエイターの事務所開設の際の初期費用補助制度を新たに設けるなど、市はアーティスト誘致に関しても積極的に効果的な施策を打ち出しはじめた。連鎖反応が始まった。

リレーする構造～都市の経験

民間へのリレーもある。本町ビル45（シゴカイ）がそれだ。ZAIMの入居条件が契約期間が短い等不安定だったため、北仲の建築系のチームが移転をためらった。北仲に誘致した責任もあったので、入

居場所探しに奔走したが、なかなか見つからない。最後に出会ったのがBankARTの目の前の本町ビル。オーナーが私達の活動に理解を示してくれた。「BankARTさんの活動はみていましたから」と、再開発計画のあるビルの4・5階を北仲と同条件で提供してくれたときは、嬉しさと同時に身の引き締まる思いだった。正に都市の経験という言葉があてはまる象徴的な出来事だった。これまで幾度となく「公設民営の新しい可能性」と題したレクチャーをおこなってきたように、BankARTは、公と民を往来することで、それらの可能性を最大限に引き出すプログラムを試み続けてきた。

BankARTのミッション

2004年にスタートし、2年の実験的な暫定プログラムが、2度延長され、現在7年目を終えようとしている。まだまだ前途多難だが、先に記した創造都市構想の指標にもとづき、以下のミッションを自らに課しながら、現在は安定した運営（経営）を継続している。

- (1) さらなる経済的な基盤の確立
- (2) 他都市及び国際的なネットワークの構築
- (3) 創造界隈プロジェクトのパイオニア的存在としての自覚

以下に(1)～(3)を簡単に説明しよう。

カフェバブ、ショップ、スクール、スタジオ、コンテンツ等のベース事業の安定化とともに卒展に代表される年間200を超えるコーディネート事業の多数多様化、主催事業の動員力……。自己収益は年々増加し、現在では8,000万程度。市の補助金と合算して攻撃的なプログラムが組むことができる安定した経営状態を築き上げることができた。

国内外のからの視察は年間100以上あり、我々のようなアート・ニシアティブ組織のネットワーク事業（会議の開催や文化庁との出版事業）も多い。また新しい日韓の交流プロジェクト「続・朝鮮通信使」の継続的な取り組みも始まり、その深まりと広がりも加速している。北仲BRICK&WHITEにおける53チーム253名のクリエイターを誘致、本町ビルシゴカイの17チームに続き、宇徳ビルヨンカイ（全て集積アトリエ）のコーディネート。「食と現代美術」のシリーズにおける地域（野毛/馬車道/初黄日之出町）とのコラボレーション。「ランドマークプロジェクト」における街へのしみ出しのプログラム。（使っていない空き地や屋上、河川上、馬車道駅や市庁舎のようなパブリックスペースの活用）等々……。この地域全体の温度が上がっていくような様々な仕掛けを、自覚しながら継続してきている。

BankARTはどこに行く？

2011年度で8年目をむかえるBankARTであるが、これからどこにこうとしているのだろうか？ これまでもいくつかの紙面で発表しているが次の文章を引用しよう。

『いつもBankARTは恵まれているなと思う。予算や施設面、給与

などは決して他の公設の施設に比して好条件とはいえないが、何よりも常に行政の人々が一生懸命だし、実験事業であることの自由度があり、スリリングで本当に楽しい。でもこれからはどうなのか？ はたしてこのままトップダウンの用意された作文の上にあぐらをかいてよいのか？ ニューヨークでもベルリンでもアートがイニシアティブをとって街を形成してきた。不合法に略奪した場所でも、民間、行政、国がリレーし、その文化度を上げることで街を展開してきた。でもこの方法は現在の日本にはあてはまらない。横浜市がおこなっているように行政からスタートし、民間と組んで、民間に移管し... という方法をとらざるをえない。問題はここから先だ。誤解を恐れずにいうと、BankARTはだからこそ、今の段階で野に下ることが重要だと考えている。今後も行政との協働作業は続き、大きな支援を受けて運営されていくことは確かだが、だからこそBankARTは自ら関わりたい場所を見つけ、耕し、経済的に自立していくことが大切なのだ。ある指定管理者制度に関連するシンポジウムの席で「モチベーションもなくできた美術館は、モチベーションもなく消えていく」と発言した。この言葉はむしろBankARTそのものに突きつけられている言葉だ。BankART1929は第二段階に入ったと思う。自身がより深く都市に入り込み、思考し、自分の体を少しばかり変形し、敵意を歓待に変え、都市の経験を蓄積し、そして徹底的に開いていくこと。こうした作業を淡々と続けていきたいと考えている。』一昨年12月に北沢氏が亡くなった。氏を送る会に際し、彼の業績や送る言葉で構成された本の中の拙文を援用して、最後のまとめとしたい。

構想（夢）と実践（仕事）

北沢さんは何をみていたのだろうか？ なぜ創造都市だったのか？ 誤解を恐れずにいうと横浜は150年前、国が開港を決めたゲームのような街だ。戦後、横浜は志をもった都市へと脱皮を図る。国とどう係わるか、どのように自立するか？ 北沢さんは、横浜と国との関係を最後までこだわっていたように思う。創造都市構想の4つのベクトルは、北沢さんの複雑で明晰な頭脳を表象している。アーバンデザイナーとしての都市に対する意志、まちづくりにおける子細なリアリティのある感覚、アートあるいはレイヤーやクラウドのような実体の伴わない構造への深い理解、そしてそれらを開くこと。これら全てが絡み合い、複雑だけれどわかりやすい、強いけれどしなやかな都市空間の構築を目指していたように思う。常に鳥の眼と虫の眼をもちながら、構想（夢）と実践（仕事）を往来していた北沢さんは、今でも僕たちの背中を遠くから押してくれている。

（いけだ おさむ）

財団法人 民間都市開発機構発行
『新都市』2011年3月号 特集 創造都市より転載